a.b.c. 2008 Spring
architectural bulletin of chikurikai
築理会報 2008 春号　2008 年 4 月発行　Vol.41
東京理科大学工学部Ⅰ・Ⅱ部建築学科築理会事務局

理科大発祥の地記念碑完成

前号の会報（2007 年秋号）でお知らせした母校発祥の地の記念碑がこの程、東京物理学講習所（東京物理学校の前身）の所在した旧麹町区飯田町４丁目（現千代田区飯田橋２丁目）に完成しました。

既に東京理科大学ホームページに示された発祥の地発見の説明（卒業生向け「ニュース＆イベント」欄）をご覧の方もおありでしょうが、我が築理会の活動を含めご報告したいと思います。

ちょうど一年前の３月、築理会に対し「発祥の地記念碑建立の会」発起人の一人である西村和夫氏（昭和 27 年化学卒）から記念碑建立に関する協力要請がありました。内容は、「発祥の地発見に伴い現地に記念碑を建立したい。ついては事業化の暁には、碑のデザイン案（候補作品）の提示、細部設計、工事費の見積作成等の協力をお願いしたい」とのことでありました。事業化には相当の時間が係るのでは…という下衆の勘ぐりは見事に外れ、わずか４ヵ月後の７月末には事業化も決定し、８月初め、いよいよ築理会の能力が問われる場面を迎えることとなりました。

発起人のご要望によると、出来れば９月中にはデザインを決定のうえ碑の設置予定地を管理する千代田区に建立の許可申請を出したいとのこと。与えられた１ヶ月半の間に、デザイン案の募集（築理会ホームページを活用）・絞込み、発起人の会へのデザイン案提示を、発起人の会によるデザイン決定後に、設計図、見積の作成を行わねばならないハードなスケジュール。早速、築理会にワーキンググループを設置し所要の作業に着手。夏休みを返上した努力の甲斐もあり、千代田区との事前調整も整い、どうにか１０月初めにはデザイン決定に至りました。

記念碑建立の申請及び設置工事発注は大学本部にて行われ、昨年 12 月に㈱ A.G.M と契約、千代田区から設置許可も下り、1 月 29 日大神宮にて関係者により工事安全を祈願、二年振りの降雪の影響があったものの２月５日に無事着工、この度竣工の日を迎えました。

高さ２メートル、スクールカラー（えんじ）のインド産御影石の碑は隣接する堀留北児童公園の風景にも溶け込み、以前からその場所にあったかと錯覚させるほど周辺環境と馴染んでいます。

ちなみに、記念碑のデザインは池田直哉氏（２部平成１８年卒）、施工は山ノ井義重氏（１部昭和４７年卒）、まさに設計から施工まで築理会会員の手によるものです。両氏を含め本事業にご協力頂いた築理会会員各位に対し紙面を拝借し御礼申し上げます。

ところで、記念碑の募金（一口 2000 円、理窓会で受付中）お済ですか？　（Ⅰ部４期 林 孝夫）

平成 20 年度築理会総会・懇親会のご案内

今年度の築理会総会・懇親会を下記要項にて開催することとなりました。
昨年同様是非多数の皆様にご参加いただき、旧交を温めていただきたくご案内申し上げます。

記

1．日時　平成 20 年 5 月 24 日（土）
　総　会：午後 3:00 ～午後 3:15
　講演会：午後 3:20 ～午後 4:00
　懇親会：午後 4:00 ～午後 6:30
※築理会会費納入の有無にかかわらずどなたでも参加できます。

2．会場　神楽坂校舎 1 号館 17F 会議室、講堂

3．会費　一人￥6.000（当日）
　但し前納される方は割引料金￥5,000 といたします。
　（前納期間は 5 月 10 日まで）
　（振込み先：郵便振込「築理会」宛
　　口座番号　00110-5-171952）

4．催物概要
・講演会「チベット建築 ～周辺諸国からの影響とその独自性～」 大岩　昭之
・理大出身歌手 2 名によるライブ　祥子＆タカミ
・その他

5．参加申込
出席希望の方は下記事務局宛に「氏名・卒年・連絡先」をメールまたは FAX にてご連絡ください。
築理会事務局（梅津　裕二）
e-mail：yumezu@rs.kagu.tus.ac.jp
FAX：03-5213-0976

A round-table talk

若手が語る「現場のいま」

建築の原点は現場にある。建設現場で働く若手の卒業生たちは、どんなことを考えながら、どんな仕事をしているのだろうか——。オマーン大使館の建設現場で働く大林組の川口素子さん、丸の内パークビルディングの現場で躯体工事を担当する竹中工務店の中山裕介さんに集まっていただき、石神会長とともに「現場のいま」をテーマに話を聞いた。

年度末で忙しい中、3月21日に九段校舎にお集まりいただいた

——まず、お二人のプロフィールといま働いている現場の概要をお聞きしましょう。では中山さんから。

中山　倉渕研究室を2005年に卒業して竹中工務店に入りました。現在、勤務している「丸の内パークビルディング」が二つ目の現場です。

赤レンガ積石造の「三菱一号館」の本格的な復元で注目を集めている工事です。私が担当している高層棟は34階建てのS造で、地上鉄骨・躯体工事を6カ月半で立ち上げるという非常に厳しい工期です。掘削工事を進めながら鉄骨を立ち上げており、24時間体制で工事を進めています。

中山裕介さん

この現場では現場管理だけで約60人の職員が働いています。

もともと、僕は強い現場志望ではなかったので、どうかな思っていたのですが、体を動かすことは性に合っていました。

川口　2005年に真鍋研究室の修士課程を修了しました。

大学入学当初は、設計に携わっていきたいと考えていましたが、4年生の卒業研究で1カ月間の現場調査を行い「ゲンバって楽しい！」と強く感じました。大林組は女性の現場監督を採用していると聞いて、希望したんです。

川口素子さん

現在勤務している「在東京オマーン王国大使館」は、自分にとって2つ目の現場で、主に内装工事を担当しています。

SRC造、地下1階・地上7階建、延べ床面積約7000㎡の建物です。大使館という、普通に生きているとあまり縁のない建物ですが、内外装ともグレードの高い仕上げで、納まりなどがとても興味深いです。

——現場の仕事はハードなイメージがありますよね。女性が現場で働いている例はまだ少ないと思うのですが、実際に現場に配属されて、びっくりしたことなどはありませんか？

川口　最初から、ある程度の覚悟をもって臨んだので、それほどは…（笑）。ただ現場にはいろいろな人がいますね。しっかりした人も多い半面、マナーの悪い人も中にはいます。職員の中でも様々な考えを持った人がいて、同世代の人ばかりと接してきた学生の頃と比べて驚くことも多いです。

中山　私は「週休二日」と聞いていたのに、現場は24時間動きっ放しで、止まったことがない（笑）。これが一番の悩みですね。

川口　逆に私のいる現場は高級住宅街の中にあるので、土日作業や残業時間にかなりの制限があります。

——同じ工事現場でも両極端ですね。

中山　工期率というのがあるんですけど、一般的な作業で終えられる工期を100％として、工期がどのくらいの長さなのかを計るのですが、今の現場は56％なのです。

だから休みが取れないし、きちんと見たいのだけれども、工程に追われてしまい、どうしても流

して見ちゃうことがある。それは悩みですね。

——お二人の一日はどんな感じなのですか？

中山　今は厳しいですよ（笑）。まず毎朝コンクリートを打つので、6時30分にコンクリート打設前の確認をします。そして7時30分からコンクリート打設。その後、7時50分から朝礼です。午前中は職人との調整打ち合わせをあれこれこなしているうちに終わってしまいます。
午後はコンクリートの管理、デッキですとか防水ですとかの管理、こまごまとしたクレーム対応などをこなします。午後6時から職員打ち合わせ。それが終わってからデスクワークです。

——かなりハードワークですね。

中山　身体が丈夫でよかったなあと、つくづく思っています（笑）。

川口　私は中山さんに比べると人間的かな（笑）。7時30分頃に現場に着き8時から朝礼です。職長に作業指示書を配って、午前中は現場を歩き回りながら、職人さんたちから話しかけられ、わからないことは事務所に戻って調べて細かな問題をつぶしていくという繰り返しです。
11時30分から各職間の作業調整の打ち合わせをして、お昼は現場事務所で「ゲンバ弁当」です。
午後はデスクワークも多く、必要に応じて何回か現場に出ます。午後5時から明日の作業の指示書を書いたり、写真を整理したり…。午後8時から10時には帰ります。

——ハードな仕事のなかで、感じる仕事のやりがいってどんなことですか？　よかったなあって感じる瞬間は。

中山　私は強く現場勤務を希望していたわけではないので、最初は「現場勤務はどうかな」と思っていたのです。でもいい意味で裏切られました。
こちらが直接、手を動かすわけではないのですが、お願いしたことが、見る見る目の前でできていく。それを見ているのも楽しいし、最前線でものづくりをする職人さんたちとの話も楽しい。
二つ目の現場で、ようやく先の工程がよめてきた。最初の現場は何がなんだかわからなかったから。先読みができて、いい段取りがうまくいって、職人さんがうまく動いてくれると、「やった」という達成感があります。
たとえば一昨日、雨が降ったのですが、工程を考えると約5000㎡のスラブコンクリートを打たなければならない。闇雲に打つと補修に数百万円かかる。じゃあそれを防ぐためにどう養生すればいいか。「ここだけは雨に打たれないようにしよう」などと知恵を出し合いながら、工夫を凝らしてうまくいった。じんわりとうれしかったですね。

川口　私も二つ目の現場で、ようやく少し先が見えるようになってきました。
そうすると、工程の中でどの作業をあらかじめやっておかなくてはいけないか…などを図面から読みとって、考えていくことが楽しくなります。しかし、今は経験豊富な職人さんから「ここはどう段取りしてるの？」なんて聞かれて、作業の「抜け」に気付くことも多く、反省の毎日です…。
建物は完成した後は隠れてしまう部分が多いですが、見えなくなる部分を自分が知っているということが嬉しいですね。

石神会長　臨場感のある話ですね。とはいえ、女性が現場に行くと、人使いや相手との関係で難しさはないですか？

川口　ええ。なので、私は気持ちよく仕事をしてもらうために心掛けていることがあります。
職人さんに頼まれたことで、こちらが「やりましょう」と約束したことは必ず守ろうとしています。職員が5人の現場で、私は一番下っ端で女性ということもあり、職人さんにとっては色々頼みやすい。でも、どんな小さなことも、忘れず守る。

石神会長　女性だから話を聞いてくれない、なんてことはないですか？

川口　そうですね。だからこそ約束は守ろうとしています。すぐに効果は出ないかもしれないけれど、長い目でみたら信頼を育めるのではないかと思っています。それから、力

石神会長

仕事など、どうしても自分には苦手なこともあるし、そんなときは特に臆することなく女であることを前面に出してもいいかなと思っています。

石神会長　中山さんは大きな最先端の現場ゆえの苦労もあるでしょう。工程の調整などは？

中山　特に搬入・搬出に関連した工程の調整がシビアですね。申し訳ないけれど入れてくれとか。午後の６時ごろから職員同士の調整を始めて、日付が変わってしまうこともあります。

――川口さん、同じ現場技術者として中山さんに聞いてみたいことはありませんか？

川口　現場にポンプ車を何台くらい入れてコンクリートを打ってるのですか？

中山　えっ、ポンプ車ですか？ 今日は同時に８台入りました。打設量も4200㎥とか、掘削土も何千立米とか、あまり参考にならないスケールなんですよ。

川口　卒業してから、現場の技術者として働いている同窓生と話す機会ってあまりなかったんですよ。それだけのコンクリートを打つのにポンプ車をどこにつけるのかな、なんて具体的な話が気になっちゃいますね。

――中山さんは？

中山　まだまだ建設現場は男社会だし、男前提の仕組みだと思うんです。僕みたいに机で寝るわけにもいかないだろうし。川口さんは体力的にもきつくないですか？

川口　体力的には確かに厳しいときもあります。重いものはかつがないことにしている（笑）。その一方で女性だから気づくこともあるし、そういった視点を生かしていきたい。

中山　もっと現場にも女性が出てきてほしいですね。

――話は変わりますが、築理会への要望や意見はありますか？

中山　残念ながら学生時代に意識する機会がなかったのです。最後の最後、卒業するときに急に存在を知らされ、「入りませんか」と言われても親近感はなかなかわかないと思いました。在学中に触れる機会がほしい。

石神会長　その通りなんですよ。そんな思いもあって２年前から「築理会賞」を始めました。卒業制作の作品集「りぼん」も学生とOBとの距離を縮めたいという取り組みです。

そんな活動を地道に継続することが大事ではないかと思っています。築理会も今の芽をあせらずに育てて、引き継いでいけば、また次の芽が育っていくのではないかと思っています。

女性についても同じ。女性の核になる人がいて、だんだん広がるようになってほしいと思います。

――最後になりますが、お二人とも10年後に「こんなふうになりたい」というイメージはありますか？

中山　前の現場の所長がすごかったんです。小さい現場だったのだけれど、工程の最後までしっかり見えていて、そこから外れそうになると、さりげなくフォローしてくれる。全体が見えるようになりたい。

川口　工程のもっと先を組み立て、いろいろな職種に段取りよく動いてもらえるようになりたい。いまは毎日、つらいことと楽しいことの繰り返し。10年後も、この仕事を好きでいたい。

中山　そうですね。好きでないと続けていけないですよね。

――10年後も、この仕事を好きでいたい。実感のこもった言葉だと思います。今日はどうもありがとうございました。

築理会・事務局長をふり返って

大岩　昭之（Ⅰ部３期）

下の写真は昭和 58 年 (1983)、第 1 回築理会総会・懇親会が芝の郵便貯金会館で行われた時の写真である。築理会そのものは、この 12 年前から存在し名簿は、それまでに 5 回発行していた。しかし、学内の有志による名簿の発行だけでなく、広く卒業生が参加・活動する会（築理会）にとの機運が高まり第 1 回築理会総会・懇親会が行われたのである。この時の会長は 1 期の福島正之氏、副会長が 2 期の猪川理郎氏、事務局長が 9 期の梅津裕二氏であった。私はこ年の翌年から事務局長を引き受けたが、今年度 (2008 年度) より、事務局長を再度、梅津氏にお願いすることになる。築理会の公式の記録は「東京理科大学工学部 40 年間の記録（平成 16 年発行)」に載せているので、参照していただきたい。

築理会は第 1 回総会・懇親会の以前から存在していたと書いたが、この揺籃期の頃については会報 (2006 年春号) に少し載せている。いまでこそ建築業界においては理科大卒（理工学部も含め）は大きな位置を占めているが、当時はまだ理科大に建築学科があることもあまり知られていなかっただろう。それだけに卒業生はまとまりもあったかも知れない。昭和 55 年度の記録を見ると、会費納入は 560 名／ (1,146 名)、納入率 49％と記されている（会費 2,000 円)。この頃は会報も発行していないから、名簿の代金（全員に発送していた）のようなものであるが、それにしても現在の築理会会費納入率 10% を切っているのを見ると驚異的な数字である。

築理会の活動には盛衰があった。新たに築理会として活動初めて頃（昭和 58 年）は会報年 2 回、名簿毎年発行、総会・懇親会毎年開催であった。第 2 階総会・懇親会では特別講演として芦原義信先生をお呼びしている。しかし当時は限られたメンバーでの活動で、マンネリと疲れもでてくる。会報発行もしだいに年 1 回となり、発行しない年もあった。総会・懇親会も毎年する必要もないのではないかとの意見もあり行わない年もあった。平成 5 年は活動なしで、この年の会費としての収入は 10 万程度、支出もほとんど出されていない。この頃が築理会としての最も停滞していた時期である。それでも名簿だけは、中断してしまうと再度、整備するのは大変な手間がかかるので、最も長い期間空けた時で 3 年であり、発行は今日まで続いている。名簿は昨今、個人情報保護法によって発行が危ぶまれている。発行していない大学（建築学科）も多い。しかし、同窓会の名簿は法に触れているわけではないのだから、卒業生の情報の基礎として維持はしていくべきだろう。今日、理科大では卒業生名簿も出していないので、築理会名簿は重要である。

昭和 58 年 (1983) 東京郵便貯金会館にて

話は少しそれたが、停滞している築理会を何とかしようとの声が学内の若い人からでてきた。小泉隆氏 (1 部 22 期）の努力により平成 6 年「活性検討委員会」幹事会を立ち上げた。そして翌年は平成 7 年は建築学科卒業 30 周年であり記念総会・懇親会を計画する。この起爆剤に「建築学科 OB 作品展」を開催することになった。これは理科大 1 号館 17 階記念講堂で 10 月 12 日～ 15 日（平成 6 年）開催。この作品展は工学部建築学科（築理会）だけでなく、野田建築会にも声をかけた。出展者は両学科卒の建築家 20 名、又、コンペ部門では「新建築」や「学会」コンペの入賞・入選作品も展示、こちらも 40 作品の展示であった。オープニングパーティーには、理窓企業人会からの来賓、本学教員など約 80 名が集まる和やかな懇親パーティーであった。この作品展の記事は「新建築」などにも掲載された。これは今までの築理会、最大の行事である。ところで、これだけの行事、停滞していた築理会でどのように費用を出すことができたのかと疑問に思われる方もおられるかと思うが、実は平成 3 年、久我新一先生が、理科大を退職される時、築理会に 100 万円のご寄付をいただいていた。もしこの寄付金がなければ、このような作品展の開催は不可能であっただろう。

平成 7 年 (1995) 1 月、第 7 回（30 周年）総会・懇親会が飯田橋会館で開かれた。会長も福島氏から八木嘉也氏 (1 部 3 期) にバトンタッチされ“新生築理会”として新しいあゆみがはじまった。新生築理会では会則の改定、会報年 4 回の発行、セミナーの開催、見学会など、会費も改正で 5,000 円に値上げしている。新生築理会の活動が実ったのか、この年（平成 7 年）の決算報告をみると会費収入 587 名、この年までの卒業生は約 3,700 名（２割は不明者とすると実室約 2,950 名）なので、約 20％弱の会員が会費を払ったことになる。最初の見学会はお台場の「フジサンケイビル」、第１回セミナーもタイムリーな松崎育弘先生による「緊急報告・阪神大震災をふりかえって」であった。この頃は築理会に新たな活気が生れていた。

しかし、この熱意、なかなか持続していくのは難しい、年 4 回会報の発行は’96、’97 年だけであり、以降は会報の年発行回数は減っていく。(次号へ)

新連載　リレービューマインド

記事を書いた人が「次の執筆者」を指名する新連載。
場合によってはテーマの指定もあり。
トップバッターは、Ⅰ部６期藤森さんの「東京を美しく」だ。

東京を美しく

藤森　正純（Ⅰ部６期）
株式会社日本設計　住環境デザイン部長

東京が美しくないという人がいる。そうだろうか、いわゆる都心の一等地周辺などは比類のない美しさではないか。道幅も広く街路樹や公園の緑も豊かだし、建物も立派だ。これなら胸を張れるではないか。ロンドンのリージェントストリートといったってたいしたことないさ、ニューヨークの５番街、なに薄暗い通りだよ。東京の銀座通りの方がましなくらいさといって、誇らしげに表通りを眺めているうちはよかった。やがてわが家の近くの駅前の通りを曲がり、住宅地に足を踏み入れたとたん、うーんと唸ってしまった。4.5ｍ幅の道路には電柱が立ち並び、車が通るたびに歩行者はその影に身を寄せる。見上げると電線がまるで蜘蛛の巣のようだ。これも東京。懐かしいといえば、もはやそれは痩せ我慢。

先日、多摩ニュータウンを訪ねた。低層集合住宅地で建設後30年ほど経っているせいか、緑もほどよく育ち、なるほどこれなら英国の最近の低層集合住宅地と比べても遜色がない。歩車が分離され安全そうだし、もちろん無粋な電線の蜘蛛の巣もない。新しく造る町は当然、こうあるべきである。しかし、これは例外中の例外なのだ。わが家近くの幹線道路には銀杏並木があり、４～５階建てのビルの高さほどに成長している。歩道幅員がそれほど広くないので、毎年、落葉後に枝の剪定が行われ、その年に成長した分だけ刈り取られてしまう。街路樹の間には電柱が立っており、十数本の電線は紡錘形をした銀杏の真ん中、複雑な形の枝の隙間を見事に貫いている。いやはやそれは芸術的だが、木にとっても、東京電力の職員にとっても大変だろう。きっと防災上の問題もあるに違いない。なるほど、道路管理者は街路樹など植えたくないはずだ。

先年、交通事故で亡くなった米国の高名なランドスケープアーキテクトのロバート・ザイオン氏とかつて仕事をしたことがある。来日したときに講演をお願いした。彼はスライドで米国の同じ街の風景を２枚見せてくれた。まったく同じアングルだが、１枚には電柱と電線があり、１枚にはなかった。まるで別の街のようだった。電線のある１枚が日本の街のようで、慣れ親しんだ風景に見えた。だが、美しくはなかった。そうだ、東京から電柱をなくせばいい。それだけで東京の街はもっと美しくなるだろうとその時思った。

オオツキの社会人一年生日記
こんなに現場実習？！

大槻　尚美（Ⅰ部41期）
大和ハウス工業越谷支店集合設計課

入社して１ヵ月後の５月、三重で現場実習をしました。現場実習とは、住宅が建つまでの工程を、身を持って体験することです。技術系の住宅に配属された同期が班に分かれ、作業を行います。また、新製品の試作棟や実験棟を見学したり触れたりと、充実の２週間でした。

■敷地を知る

（測量実習／掘削・地盤調査）

周辺の環境→境界杭の確認→レベル出し（トランシット）→掘削→埋め戻し→地縄張り（遣り方）→ＳＳ地盤調査見学

トランシットの使い方・転圧機器の操作を主に習い、土質によって埋戻しの体積が変わることを学びました。

トランシット

タコ

コンパクター

ランマー

■素材を知る

（基礎工事／コンクリート調査）

スランプ値の計測→空気量の計測→塩化物量の測定基礎の材料となるコンクリートを受け入れる作業を実際に計測しました。

スランプ試験機

カンタブ試験

空気量試験

アンカー引抜試験

■工程を知る

（安全指示／足場組立／墨出・建方／木工事／シーリング）

自分達で住宅が建つまでの基本工程を実際に体験しました。

鉄筋の組立

バイブレーダー
（コンクリート打設）

墨出

足場の組立
（作業床設置中）

木造組立作業中
（鉄骨造の組立も実施）

シーリング作業

はみだしチクリ　向島「のみくい処　かどや」東向島から花街のほうへ移ってしまったのですが、リーズナブルなのに何食べても美味しいです。ちょっと行きにくいかな？

7万社の工務店代表として「200年住宅」に取り組む

青木　宏之（Ⅰ部5期）
青木工務店　代表取締役会長

昨年秋に7万社の工務店が加盟する全国組織、社団法人全国中小建築工事業団体連合会（全建連）の会長に就任。工務店型の「200年住宅」の推進に取り組んでいる。

2006年にスタートした住生活基本法、そして改正建築基準法に基づく確認審査の厳格化、これに続く小規模木造住宅の特例廃止、瑕疵担保保証の資力確保の義務化（2009年11月）など、これからの2年間は、地域密着型で仕事をする工務店にとっての正念場となる。

この局面を乗り切るには、地域工務店のもてる特色ある技術、サービスのノウハウを結集し、連帯をはかるしかない。耐震・省エネ・バリアフリーに向けた住宅改修の仕事は、工務店のもっとも得意とする分野。これらの活動と実績の延長線上に「200年住宅」や地域の文化・風土・環境への対応が現実のものになると考えている。

全建連は国が認める唯一の工務店経営者の全国組織。とはいえ、これまではさまざまな事情から、工務店経営者の集団としての機能を十分に果たし切れていないのが実情だった。

北米にはNAHB（ナーブ）という工務店（ホームビルダー）の全国組織がある。ホームビルダーの店頭には誇らしげにNAHB会員章が飾られ、まさに業界の一員として住まいづくりに携わっていることを誇示している。全建連を日本版NAHBのような組織にしたいと考え、新たに全建連の中にJBN（Japan Builders Network）も発足させた。

JBNは、既存の組織の枠を超えたわが国の工務店業界の全国組織となることを目指していく。国民から信頼され、必要とされ、次の世代を担う後継者、従業者、協力専門職が誇りと希望を持てる産業に発展させるのが大きな目標である。

国産材を生かした全建連型の「200年住宅」も近く発表する予定だ。林業との連携を視野に入れながら、活動を進めていく。

「りぼん」が結ぶOBとの交流の輪

吉川　和博（Ⅰ部41期）
山名研修士課程

「りぼん」とは「理本」と書き、東京理科大学工学部建築学科における、1年間の学生の活動をまとめた本です。

2006年、当時卒業制作を終えたばかりの修士1年の学生達が発案し、工学部第一部建築学科の有志の学生による卒業制作19点を掲載した本として発行されたことが始まりでした。2年目となる2007年は、工学部第一部に加え工学部第二部卒業制作、修士制作、設計製図優秀作品、そして学生による課外活動を盛り込み、東京理科大学工学部建築学科の1年間をまとめた本とすることができました。

りぼんの編集にあたって、沢山の先輩方に多大なご支援いただきました。また、学生にとっては、実際に社会で設計活動をされている先輩方と交流できたことが、何よりも良い経験となりました。そして、建築学科の先輩方には、学生の活動を応援してくださる方々が沢山いらっしゃるということを実感しました。

しかしながら、学生と先輩方との交流の機会があまりないのも現状です。また、OB会である築理会の存在も、学生にとっては少し遠い存在であることも否めません。

「りぼん」というタイトルには、世代や学校、そして分野を越えて、様々な人達と広く交流のりぼんを結びたいという願いが込められています。この本が、学生と先輩方との交流のきっかけになればと思います。また、この交流を通して、卒業した後は自分も築理会の一員となり、後輩達の積極的な活動を応援してゆく立場になりたいと感じました。この活動が10年、20年と継続してゆくことで、東京理科大学の建築学科がより活性化してゆくことを願っています。

進む「省エネ法改正」に注目を

2008年から京都議定書の第一約束期間が始まり、環境が大きなテーマである洞爺湖サミットの開催も7月に迫った。「1990年比でマイナス6%」の達成に向けてCO2削減が大きく求められる建築・住宅分野でも、さまざまな環境対応の取り組みが進む。3月4日に閣議決定された、エネルギーの使用の合理化に関する法律（省エネ法）の改正案もその一つだ。

閣議決定された省エネ法改正案には、同法の適用範囲拡大や罰則の強化が盛り込まれた。

改正案の柱は①大規模な建築物の省エネ措置が著しく不十分な場合の命令・罰則の導入、②一定の中小規模の建築物について、省エネ措置の届出などを義務付ける、③登録建築物調査機関による省エネ措置の維持保全状況調査の制度化――の三つ。

大規模な建物（第一種特定建築物＝2000㎡以上）では、外壁や窓の断熱、空気調和設備の効率的な利用といった省エネ対策を著しく欠いている場合、命令の措置が講じられ、命令に従わない場合は100万円以下の罰金が科される。また、300㎡を超えるアパートなどの建築物を視野に、新たに新築・増改築の際の届出義務を設ける。

さらに住宅分野では、いわゆる「トップランナー方式」による規制や建物外皮の断熱性と建築設備の効率性の総合評価から建築物の省エネルギー性能を評価する「設備組み込み基準」の作成も予定されており、住宅の設計・施工に影響を及ぼす可能性がある。

改正省エネ法は年内の公布、2009年4月1日からの施行を目指している（届出対象の拡大など一部は2010年4月施行）。現在、住宅の省エネ性能を検討する委員会のワーキンググループなどでたたき台の検討を進めている。秋にはこれらが明らかになるはずだ。

（Ⅰ部21期　安達 功　日経BP社）

平成19（2007）年度　築理会決算報告（仮）

収入の部		支出の部	
平成18年度繰越金	1,162,947	会報（2回）	854,624
築理会会費合計	1,301,500	平成19年度名簿	0
広告収入	204,960	事業支出	248,000
リボン収入	27,500	事務費	202,811
その他	576	運営費	117,040
総会より	21,416	通信費	64,273
		来年度繰越金	1,232,151
合　計	2,718,899	合　計	2,718,899

平成20（2008）年度　築理会予算（案）

収入の部		支出の部	
平成19年度繰越金	1,232,151	会報（2回）	950,000
築理会会費合計	1,510,000	平成20年度名簿	900,000
広告収入	800,000	事業支出	298,000
		事務・運営費	300,000
		通信費	50,000
		予備費	100,000
		来年度繰越金	944,151
合　計	3,542,151	合　計	3,542,151

平成20年会費納入のお願い

現在、平成20年度の会費の納入をお願いしております。同封の振込用紙にて、お振り込み下さい。

今後のさらなる築理会発展のため、多くの方のご協力をお願いします。

年会費　3,500円
加入者名　築理会
口座番号　郵便局　00110－5－171952

第9回ちくご会ゴルフコンペ開催

平成19年12月2日(日曜日)、久しぶりにお会いした諸兄12名は、朝まだ暗い道に迷いながら、眠い眼をこすりながら、AM6：30、千葉県袖ヶ浦の東京湾カントリークラブに元気に、なんとか集合いたしました。

朝靄立ち込めるなか，朝日が逆光で眩しい久保田コーススタートホール。7:14、佐治会長の見事な（実際はまるっきりの逆光でまるっきり見えませんでした）のティーショットで第9回ちくご会親睦ゴルフ会が始まりました。

朝、少々寒かった天候も、1～2ホールですっかり晴天。徐々に気温も上がりホールを重ねる毎に、なぜか??汗もかき出しました。

午前のハーフは、順調に進みましたが、10時前の早めの昼食後の後半戦は1ホール25分、待ち、待ちで調子を崩した方も多数?それでも終了後のパーティは大盛り上がり。楽しい一日をいただきました。

成績発表では常勝田中勉君が欠席で、思いがけずも、不肖．小生がおこぼれをいただきました。皆さん、ありがとうございました。

また、今回一人で幹事をされた渡辺さん、ありがとうございました。次回幹事の任を林さんと受けましたので、一言お願い。

「私でも優勝できました。年に2回ほどです。是非集まりましょう。」

次回は、4月の予定です。皆さん、参加、よろしくお願いいたします。

（I部6期　小野寺　哲）

「編集後記」

年度末のお忙しいなか、座談会に参加していただいた川口さん、中山さん、ありがとうございました。建設現場の「いま」が伝わってくる臨場感のある話と、「10年後もこの仕事を好きでいたい」という言葉が印象に残りました。そして四半世紀の長きにわたって築理会の事務局長を引き受けてくださった大岩さん。本当にお疲れ様でした。なお築理会の歴史を振り返る大岩さんの寄稿は、次号へと続きます。ご期待ください。　（安達 功 adachi@nikkeibp.co.jp）

築理会報 2008春号

2008年4月発行　Vol.41

発行所　：東京都新宿区神楽坂1-3
東京理科大学工学部Ⅰ・Ⅱ部建築学科
築理会事務局　03-3260-4271（内6674）
03-5213-0976（FAX）

編集長　：安達　功

編集委員：石神一郎、大岩昭之、藤森正純、広谷純弘、森清、伊藤学、渋川克也、山名善之、平賀一浩、菊地宏、東有紀、大槻尚美

印刷発送：グローバルシステム株式会社